



S U A C

静岡文化芸術大学ワーキング・ペーパー
SUAC Working Paper Series

登録番号：SUACWP-2024-007

日本における日系ブラジル人の老いの営みの人類学へ
Towards an Anthropology of Aging Japanese Brazilians in Japan

キーワード：高齢化社会、老いの営み、日系ブラジル人、浜松、多文化共生

相川ヌビアサオリ（AIKAWA Nubia Saori）
静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科グローバルスタディーズ

内尾太一（UCHIO Taichi）
静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科

発行日：2025 年 3 月 28 日

日本における日系ブラジル人の老いの営みの人類学へ

Towards an Anthropology of Aging Japanese Brazilians in Japan

著者名 相川ヌビアサオリ

所属 文化政策研究科 グローカルスタディーズ

共著者 内尾太一

所属 文化政策学部 国際文化学科
Management

著者名英語表記 AIKAWA Nubia Saori

Graduate School of Cultural Policy and Management, Glocal Studies

共著者英語表記 UCHIO Taichi

Department of Intercultural Studies, Faculty of Cultural Policy and

論文要旨(和文)

本ワーキングペーパーは、菅沼文乃著『＜老い＞の営みの人類学』(2017)を手がかりに、老いを単なる身体的な衰退や社会的な不活性化ではなく、一つの営みとして捉える視点を考察する。菅沼(2017)の沖縄での事例研究を踏まえ、本稿では浜松市に居住する日系ブラジル人老年者の事例と比較検討を行う。彼らの多くは1990年代に「出稼ぎ」として来日し、さまざまな事情から日本に定住している。本研究は、彼らがどのように「老いの営み」を形成しているのかを明らかにし、日本の多文化社会における高齢化の課題について考察することを目的とする。また、本稿は静岡文化芸術大学における大学院研究プロセスの公開促進を目指すものである。文化政策研究科の基礎科目「リサーチワークショップI」において菅沼氏を外部ゲストとして招き、得られた示唆を今後の研究の課題と展望に位置づけている。

論文要旨(英文)

This working paper examines the perspective of aging not as a mere physical decline or social inactivity but as an active practice, drawing on Ayano Suganuma's *Anthropology of Aging as Practice* (2017). Based on Suganuma's discussion on Okinawan communities, this study compares and analyzes the case of elderly Japanese Brazilians in Hamamatsu. Many of them came to Japan as "dekassegui" in the 1990s and have remained due to various circumstances. This research aims to clarify how they construct their "practice of aging" and to explore issues related to aging in Japan's multicultural society. Furthermore, this paper is also intended to highlight and develop the graduate research process at Shizuoka University of Art and Culture. As part of *Research Workshop I* in the Graduate School of Cultural Policy and Management, Suganuma was invited as an external guest, and the insights gained from this session are positioned as key considerations for future research directions.

1. はじめに

本稿の目的は、静岡県浜松市における日系ブラジル人の高齢化と多文化共生の現状について、人類学的視点から考察を加えることである。そのための先行研究として、2024年度前期に菅沼文乃著『＜老い＞の営みの人類学 沖縄都市部の老年者たち』(森話社、2017年)を講読した。また、静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科の基礎科目「リサーチワークショップI」において、菅沼氏本人をコメントータとして招き、今後の研究に関する貴重な助言を得た。本稿は、筆頭著者である相川が修士論文に本格的に着手するにあたり、重要な理論的基盤の整理を行うものであり、あわせて静岡文化芸術大学における大学院研究プロセスの公開促進を目指している。

本稿の構成は以下の通りである。まず、菅沼(2017)のエスノグラフィの概要を紹介し、沖縄における老いの実態と近代福祉国家が想定する高齢者像との相違点を明らかにし、その分析枠組みを抽出する。次に、事例の焦点を沖縄社会から日系ブラジル人コミュニティへと移し、菅沼の議論を具体的に引用しながら、外国人住民の高齢化という多文化共生社会が直面する課題を浮き彫りにする。結論では、沖縄都市部の老年者と日系ブラジル人老年者の比較研究から得られた知見を踏まえ、高齢化する多文化社会における重要な論点と今後の研究の方向性について考察する。

本稿は、相川と内尾の共同執筆によるものである。前半では菅沼(2017)の紹介を主に内尾が担当し、後半の日系ブラジル人の事例研究との比較については相川が主導した。また、双方が原稿を相互にチェックする形で執筆を進めた。指導教員と指導学生という関係上、完成原稿の学術的な品質保証については内尾が責任を担っている。

2. 菅沼文乃(2017)『＜老い＞の営みの人類学 沖縄都市部の老年者たち』を読む

2-1 近代国家における離脱理論と老いの社会的構築

菅沼(2017)は、老いが個人の生理的な現象にとどまらず、社会や文化によって位置付けが多様に変化することを論じている。かつて、文化人類学のフィールドワークにおいて、部族社会の共同体で長老の家を訪れ、古くから語り継がれてきたナラティブに耳を傾ける光景はよく見られた。このような場面では、年長者は権威ある存在とされ、コミュニティ内での意思決定を担うこともあった。

しかしながら、近代国民国家という政治組織は、老いの意味や位置付けを大きく変質させた。その特徴の一つは、国家が国民の生老病死を一元的に管理する仕組みを整えたことである。就労や納税を通じて社会福祉を行き渡らせる

一方で、それを支える現役世代と支えられる引退世代という新たな区分を生み出してきた。このような制度の中で、高齢者は衰えや不活発といったイメージと結び付けられ、介護や年金に依存する存在として捉えられることが多くなった。

周知の通り、日本は世界でも類を見ない高齢化に直面している。2024年9月15日時点で、65歳以上の人口は3,625万人と過去最多を記録し、全人口に占める割合も29.3%と過去最高に達している（総務省統計局 2024）。このことから、日本はすでに「超高齢社会」の段階にあると言える。なお、この調査結果は毎年、「敬老の日」に合わせて総務省統計局が公開している。「敬老の日」とは、「多年にわたり社会につくしてきた老人を敬愛し、長寿を祝う」ことを目的とした国民の祝日である（e-gov 2020）。

しかし、高齢化が進む一方で、少子化や人口減少が進行する現代の日本では、必ずしも敬意に満ちた穏やかな余生を迎えられるとは限らない。その背景には、高齢者が労働市場で果たしている役割の増大がある。内閣府の『令和6年版高齢社会白書』によれば、15歳以上の就業者総数に占める65歳以上の割合は13.4%に達しており、これは世界保健機関（WHO）が定義する高齢者が引き続き労働に従事していることを示している（内閣府 2024: 17）。もちろん、その中には自ら進んで就労している高齢者も含まれているだろう。一方で、本来であれば「引退」を迎える時期にもかかわらず、生活を続けていくために労働を余儀なくされている現状もある。

菅沼は、第一章で高齢化社会の現状を考察する際に、加齢による身体の衰えとともに徐々に社会への関与を少なくしていくという「離脱理論」を、近代福祉国家における基本的な枠組みとして捉えている。そして、この理論からはみ出すような老いのあり方を、エスノグラフィを通じて描き出し、老いがどのように社会的に構築されているかを再考する必要性を強調している。なお、菅沼は、同章において「老人」や「高齢者」といった表現が、ある種の社会的・政治的な意図を含む場合があることも指摘している。そのため、中立的な語として「老年者」を用いる一方、社会政策的な文脈では「高齢者」という言葉を使い分けている。本稿の以降の議論では、この用法を踏襲し、文脈に応じて適切に用いることとする。

2-2 沖縄における老い

菅沼（2017）の高齢者福祉に関するフィールドワークは、2008年7月から2014年10月にかけて、沖縄県那覇市の辻地域を中心に実施された。この調査では、福祉施設の利用者だけでなく、地域活動に参加する老年者や独居老年者にも焦点を当て、多角的な視点から高齢者福祉の実態を明らかにしている。

第一章の理論的枠組みを踏まえ、第二章では沖縄社会における老いの位置付けが整理される。一般的に、沖縄は「長寿の島」として広く知られている。このイメージは、風土や食文化を強調した現代の観光戦略によって強化された側面があるとされる。しかし、その遥か以前、18世紀にはすでに「老人は世上の宝」とする思想が琉球王国に定着していたとされ、老いに対する肯定的な価値観が深く根付いていた。沖縄では、現代まで12年周期での成年祝いである

「トゥシビー」が続けられており、97歳の「カジマヤー」は長寿儀礼として盛大に祝われる。

また、親族集団においては、老年者が祖先崇拝や祖先祭祀において象徴的かつ実践的な役割を担い、地域共同体の中でも長寿儀礼の対象や地域祭祀における重要な存在となってきた。さらに、老年者を支えるための伝統的なセーフティ・ネットワークが存在している点も指摘されており、老いに対する肯定的な価値観が制度や慣習の中に息づいていることがうかがえる。

しかし、やがて沖縄にも「社会的に保障されるべき高齢者」という近代福祉国家の発想が浸透してくる。こうした伝統と近代という二つの老いのあり方が混在した状況が、菅沼のエスノグラフィに現れている。

2-3 菅沼（2017）のフィールドワーク

ここでは第三章から第六章の民族誌的記述をまとめて整理したい。

第三章では、菅沼のフィールドとなった那覇市辻地域の概要が、その歴史とともに詳述される。戦前、この地域は遊郭として栄え、戦後は歓楽街として復興を遂げた。ここでは、戦後に辻地域へ移住してきた3人の女性（調査時点でいずれも70代）のライフヒストリーが紹介されている。彼女たちは、本島から離れた宮古島や八重山諸島の出身者であり、現金収入を得る目的で移住してきた。同様に、当時需要の高かった米軍関係者向けの飲食店や歓楽街施設で働くためにこの地域に移り住む人々は少なくなかったとされる。

第四章では、現代の辻地域の一つの特徴として高齢化が挙げられる。その最大の要因は、移住者の第一世代の子や孫が辻地域から別の場所に移住することにある。これにより、高齢化した親世代だけがその地に残る、あるいは取り残される状況が生じている。こうした高齢者同士は、もともと土地とのつながりを持たない者同士で共同体（郷友会）を形成していたが、次世代の流出に伴い、その活動は衰退へと向かった。それに伴い、地域や親族による祭祀も次第に縮小しつつある現状が浮かび上がってくる。

第五章では、沖縄伝統社会における老いと、近代福祉制度が規定する高齢化のかかわりが検討される。菅沼は、辻地域に設置された高齢者福祉施設のデイサービスでの活動を追うことで、そこに参加する老年者のふるまいを詳細に記述している。民謡レク講座や自分史研究同好会などを実施する施設側の目的は、参加者に活力やつながりを与えることでの介護予防にある。しかし、菅沼の観察によれば、施設側が想定する高齢者像に必ずしも当てはまらない老年者のふるまいも見られた。その一例として、デイサービスへの不満を直接施設側に伝えるのではなく、独自の方法で自己解決を図る姿が挙げられる。こうした行動は、近代福祉制度が描く高齢化の枠組みを超える個々の主体性を示しているといえる。

第六章では、高齢者福祉施設に関与していない、あるいは関与できない独居老年者に焦点が当てられる。その居住スタイルは多様で、アパートや一軒家だけでなく、月単位契約の宿泊施設に滞在する場合も含まれている。ここでは、老年者の男女によるさまざまな暮らし向きが語られる。日常生活において家族から特別な老年者としての扱いを受け

ることなく、また社会福祉サービスにも参加しない彼らの老いは、伝統的な価値観や近代福祉制度の枠組みのいずれにも属さない、独自のあり方を持つといえる。そのような状況下で、独居老年者の生活を支える要素として浮かび上がるのは、個人の人間関係である。それを通じていかなる居場所や役割を獲得するかが、彼らの生活の質を左右する重要な鍵となる。

2-4 老いをめぐるエスノグラフィの意義と多文化社会への応用

菅沼（2017）のエスノグラフィでは、現代沖縄社会の現状を通じて、老年者の老いにまつわる主体性や能動性が強調されている。それは、従来の人文社会科学的研究における老い——年齢を重ねることによる身体の衰えを社会的・文化的文脈の中で理解する試み——とは一線を画している。この研究における老いとは、生物学的な時間の流れの中で評価が変化していく状態ではなく、老いるという行為、すなわち「老いの営み」として解釈される。

以上が『<老い>の営みの人類学 沖縄都市部の老年者たち』の概要である。このエスノグラフィが示唆するのは、老いという現象を現場の観察から再構築していく視点の重要性である。続く後半では、相川の修士研究テーマである「在日日系ブラジル人コミュニティの高齢化」に議論を移し、菅沼（2017）の理論的枠組みを異なる文化的・社会的背景に適用することで、多文化共生社会が直面する課題を検討する。

3. 在日日系ブラジル人の老いに関する比較研究

3-1 沖縄県那覇市の辻地域コミュニティと静岡県浜松市の日系ブラジル人コミュニティ

ここからは、菅沼（2017）の議論に基づき、日系ブラジル人コミュニティの高齢化との比較を通じて、多文化共生社会が直面する課題について新たな視点を提供していく。

沖縄県那覇市の辻地域コミュニティと静岡県浜松市の日系ブラジル人コミュニティは、移住によって形成されてきたが、高齢化の経験は、文化的慣習、経済的課題、社会的支援システムの点で異なっている。

沖縄の高齢者とそのコミュニティにおける役割については民族誌的研究が行われてきたが、1990年代に経済移民として来日し始めた日系ブラジル人の老年人口の増加については、比較的新しい現象ということもあり、その実態は十分に研究されていない。

本稿の前章で述べたように、沖縄の地域社会は、古くから長寿とコミュニティの紐帯で特徴づけられてきた。沖縄の老年者は、長年の文化的・精神的慣習を通じて、地域社会に深く溶け込んでいる。辻地域とその周辺に移り住んだ人々は、米軍兵士向けのレストランや娯楽施設で働き、現金収入を得ていた。軍による土地接収と解放の歴史に加え、戦前の辻には土地を所有可能な父系血縁集団が存在しなかったことも、他地域（宮古島など）からの移住を促進したと考えられる。また、同郷人や親戚の成功談を聞き、その人脈を頼りに辻地域へ移住した人も多い（菅沼 2017：66-

76）。しかし、近年では移住者の子供や孫が辻を離れる傾向にあり、多くの高齢者は文化の継承に苦心している（菅沼 2017：91）。

一方、在日日系ブラジル人コミュニティは、1980年代初頭、経済的機会を求めて来日した日系ブラジル人（デカセギ労働者）によって形成され始めた。当初は短期滞在を予定していたが、1990年の出入国管理法改正により、日系二世、三世とその配偶者、未成年の子どもに「定住者」という在留資格が与えられた。これを機に日系ブラジル人をはじめとする南米人の間で日本への出稼ぎブームが起こった（古田 2024：54）。

特に、浜松市ではスズキ、ヤマハ、カワイなどの企業での雇用機会が豊富にあり、また雇用者が家族を呼び寄せたことで日系ブラジル人コミュニティが徐々に形成された。約30年が経過した現在、移民第一世代の多くは高齢期を迎え、老後の生活や経済的安定に関する新たな課題に直面している。そして母国に帰るか日本に残るかという選択に迷う状況に置かれている。

3-2 日系ブラジル人の高齢化という社会的課題

近代福祉国家の発展により、福祉サービスを受ける社会的弱者としての高齢者が広く認識されるようになった。また、封建制度から産業資本主義への移行により、社会的地位は個人の功績による「実力主義」が重視されるようになった。しかし、この原則は労働市場から退いた高齢者には必ずしも公平に適用されない（菅沼 2017：52-54）。その結果、寿命が延び介護などのサポートが必要になるにつれ、高齢者は社会的負担として捉えられ、その社会的地位は低下する傾向にある。このような高齢者を取り巻く社会的状況の変化は、様々なコミュニティに異なる影響を及ぼしている。

特に、沖縄都市部と日系ブラジル人の両コミュニティの老年者は、年齢を重ねるにつれて多くの課題に直面するが、その経験は文化的背景や社会的環境の違いにより、重要な点で異なっていると考えられる。

沖縄の老年者は、地域社会に深く溶け込み、お互いに助け合いながら、精神的・文化的なリーダーとしての役割を果たし得る。日本の近代福祉制度による課題はあるものの、多くの高齢者は地域社会で積極的に活動し、新しい役割を担いながら、地域との強いつながりを保っている（菅沼 2017：56-57）。

また、一人暮らしの老年者であっても、地域の人々との関係を築くことで、社会的な役割を見出すことができる。菅沼の調査によると、老年者は司祭者として宗教行事を取り仕切ったり、地域の日常的な活動を手伝ったりしながら、助け合いの関係を築いている（菅沼 2017：216）。

菅沼のエスノグラフィの事例は、老年者が人とのつながりや自身の経験を活かして地域に貢献できることを示している。つまり、年を重ねることは必ずしも社会的な活動の終わりを意味するわけではない。沖縄社会には、このような老年者に自然な居場所と社会的役割を提供し、彼らに安心感を与える文化的基盤が可能性として残されている。

老いの営みは、文化によって異なる形で表現され、各コミュニティ固有の価値観が反映された儀式や習慣として現れる。沖縄では、長寿を祝う様々な儀式が老いの節目を示

す重要な目印となっていた（菅沼 2017 : 30-31）。

一方、日系ブラジル人コミュニティでは、加齢に関する正式な儀式は存在せず、定年退職の節目や、身体機能や家族構成の変化など、日常生活における変化によって老いが認識される。

在日日系ブラジル人の第一世代には還暦を祝う習慣が残っているものの、次世代以降ではこの伝統は薄れ、誕生日を祝うことが加齢を認識する主な機会となっている。両コミュニティに共通する点として、家族の中で老年者は *Batchan*（お婆ちゃん）、*Jitchan*（お爺ちゃん）と呼ばれ、特別な敬意を持って遇されている。

ただし、親族集団の外に目を向けると、沖縄の伝統社会のように老年者を広く敬う価値観は、現代日本社会における日系ブラジル人の老年者には必ずしも当てはまらない。これは、日本の主流社会の視点から、出稼ぎ労働者として来日した外国人が高齢化したとしても、特別な敬意を向けられる対象とはならないためである。むしろ、その現状は日本人の老年者よりも厳しい側面がある。

日系ブラジル人は、1980 年代の日本の好景気とブラジルの不景気を背景に来日し、日本政府から定住者資格を得て、製造業などの人手不足を補う重要な労働力として貢献してきた（樋口 2010 : 56）。しかし、加齢とともに製造業での仕事が困難になり、働く意欲があっても継続が難しい場合もある。本研究の調査でも、浜松市在住の日系ブラジル人男性は、60 歳を機に正社員から契約社員へと雇用形態が変更され、時給が 1000 円に引き下げられたことで経済的な不安を抱えていると証言している。

日系ブラジル人の老年者は、低賃金や低年金の問題に加え、ブラジルへの帰国に関する不安など、複合的な課題にも直面している（牧田 2021 : 114）。特に、移民としての立場や年金制度に関する情報不足により、より不安定な状況に置かれている。これまでに、派遣労働の現場では、保険料徴収のコストや手間を避けたい派遣会社と、手取り額を増やしたい従業員との間で、保険未加入が黙認されるという問題も指摘されている（Shimamura 2017 : 85）。

3-3 日系ブラジル人の老いの営み：フィールド調査より

沖縄には老年者に居場所や役割が与えられる社会的土壌があるのに対し、日系ブラジル人の老年者は、生活の場としても、文化的なアイデンティティの面でも、自らが所属できる空間を日本社会の中で築いていく必要がある。その実践が、本研究における日系ブラジル人の「老いの営み」と捉えられる。

例えば、仕事以外の場面では、日本生まれや幼少期に来日した日系ブラジル人の子どもたちにポルトガル語やブラジル文化を教えるボランティア活動に参加したり、自ら栽培した野菜を他の日系ブラジル人や地域の人々にブラジルの市場（フェイラ）形式で販売したりするなど、故郷を懐かしむ活動を通じて居場所や役割を見出している。このような空間は、ブラジルで生まれ育った移民第一世代が、第二世代以降の人々を移民文化で結びつける役割も果たしている。

次に、沖縄の老年者も日系ブラジル人の老年者も、社会的脆弱性に直面しているが、その支援システムの性質は異なっている。沖縄で移住者の定住を支えたのは、郷友会と

いう移住者が形成した非行政組織であり、母村との絆を維持し、那覇市での定住を支援していた（菅沼 2017 : 81）。しかし、移住者の社会的関係の再編成や都市で生まれた第二世代の増加により、母村の共有や移住経験に基づくコミュニティの必要性は薄れていった（菅沼 2017 : 93）。

一方、日系ブラジル人の老年者は、主に家族や友人、ソーシャルメディアや教会コミュニティなどのインフォーマルな支援ネットワークに頼る傾向がある。浜松市では公益財団法人浜松国際交流協会（HICE）のような組織が支援を提供しているものの、彼らがこうした行政連携機関を利用するのは、通常、インフォーマルな支援では対応できない場合（例えば、法的解決が必要な状況）に限られている。しかし HICE によると、近年の日系ブラジル人コミュニティでは、年金、社会保障、医療などに関する不安が増大しているという。これに対応するため、HICE は年に数回、コミュニティの自立支援を目的としたイベントやセミナーを開催している。

4. 課題と展望：菅沼氏からの示唆

本ワーキングペーパーでは、日本における 2 つの異なる老い方——沖縄都市部の老年者と日系ブラジル人老年者——の経験を比較検討してきた。両コミュニティは移住、高齢化、つながりといった共通の課題に直面しているものの、文化的慣習、経済的役割、社会的支援システムの面で、その経験は大きく異なっている。この 2 つのコミュニティの比較研究は、日本における移民の高齢化研究の新たな視座を提供するものである。

これらの知見を踏まえ、2024 年 8 月 13 日に実施された「リサーチワークショップ I」での菅沼文乃氏との議論から得られた示唆を、今後の研究の方向性に位置づける。

第一に、日系ブラジル人にとっての「故郷」の意味を探究することの重要性が指摘された。1990 年代に出稼ぎで来日した移民第一世代の日系ブラジル人の多くは、ブラジルで生まれ育ったため、自身の故郷を「ブラジル」と認識している。本研究の主な焦点は、彼らの間で続く「日本に留まるかブラジルに戻るか」という語りである。これは、アイデンティティや家族、文化的な結びつきの複雑な相互作用が強く影響を与える重要な意思決定となっている。加齢に伴う病気や老後の不安、介護の必要性など、「故郷」への帰国を促す要因についてさらなる研究が必要である。また、帰国の決断から実際の帰国までのタイミングは個人によって大きく異なることにも注目しなければならない。

次に、死生観および「終活」に関する議論が行われた。「生まれ育った場所で最期を迎えたいと考えているのか」、「そのためにはどのような計画を立てているのか」といった点が話し合われた。沖縄では、自分の村や実家にお墓を持つことを望む人が多く、出身地との強い結びつきが見られる。この問題は、日系ブラジル人に限らず、日本に住む外国人全般にとって重要な課題となっている。

最後に、菅沼氏は、老いに関する研究が研究者自身の将来にどのような影響を与えるかを常に考えることの重要性を指摘した。この視点は、私たちの研究が本質的に自身の将来と結びついていることを再認識させ、研究対象が私たち自身に与える影響について考えることを促してくれた。

これらの示唆を踏まえ、今後の研究では以下の点に焦点を当てていく。すなわち、日系ブラジル人老年者の「故郷」への帰還に関する意思決定プロセス、多文化社会における死生観の形成である。その際、ポルトガル語で郷愁などを意味する「サウダージ (saudade)」は、彼らの主観的世界観を理解する上でのキーワードとなると考えている。また、本研究を通じて、老年者との関わり方や、研究者自身の老いへの向き合い方についても深く探究していきたい。

引用・参考文献

- e-gov (2020)「国民の祝日に関する法律（昭和二十三年法律第百七十八号）」e-gov ウェブサイト (<https://laws.e-gov.go.jp/law/323AC1000000178>、2025 年 3 月 5 日最終閲覧)
- 古田耕暉 (2024)「外国人労働者受け入れに対してその背後で行われていた行政の対応の変遷」『西南学院大学大学院研究論集』18, 51-64 頁。
- 樋口直人 (2010)「経済危機と在日ブラジル人—何が大量失業・帰国をもたらしたのか」『大原社会問題研究所雑誌』662, 50-66 頁。
- 牧田幸文 (2021)「多文化の背景をもつ住民の高齢化と支援」『福山市立大学都市経営学部紀要』13, 107-121 頁。
- 内閣府 (2024)「第 2 節 高齢期の暮らしの動向 1 就業・所得」『令和 6 年版高齢社会白書』内閣府ウェブサイト (https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2024/zenbun/pdf/1s2s_01.pdf、2025 年 3 月 5 日最終閲覧)
- Shimamura, A. (2017) “Sistema de previdência social no Japão: um estudo através de acordo previdenciário entre Japão e Brasil”, JURIS – Revista da Faculdade de Direito, 27(1), 1-88.
- 総務省統計局 (2024)「統計トピックス No. 142 統計からみた我が国の高齢者 —「敬老の日」にちなんで—」総務省統計局ウェブサイト (https://www.stat.go.jp/data/topics/pdf/topi142_summary.pdf、2025 年 3 月 5 日最終閲覧)
- 菅沼文乃 (2017)『<老い>の営みの人類学 沖縄都市部の老年者たち』森話社。